

ことが出来なかった。従って現象の説明のみに終わった。今後、さらに多くの冬季について調べたい。多忙な中にもかかわらず終始ご指導して下さい。福井英一郎先生、吉野正敏先生、榎根勇氏の方々に深く感謝をします。

文 献

- 1) 大井正一, 1951: 冬の天気解析の研究 (第一) 研究時報, 2, 386-400.
- 2) 岡千束, 1948: 下越地方沿岸部の大雪とその機構について気象集誌, 26, 16-20.
- 3) 藤田兼吉, 1950: 豪雪の機構について, 北陸地方気象研究会誌, 4, 22-26.
- 4) 石原健二: 1947, 北陸地方における雪の予報問

題, 北陸地方気象研究会誌, 3, 5-17.

- 5) 川本敏夫, 1950: 北陸不連続線に関する調査, 東京管区気象研究会誌, 6, 77-86, 研究時報, 12, 6, 370.
- 6) 宮沢清治編, 1960: 1957. 12. 29-31の北陸不連続線による大雪について.
- 7) 石原健二, 1947: 前掲
- 8) 国井孝次, 1945: 降雪とその機構について北陸地方気象研究会誌, S. 20 秋, 1945 年国井氏は1943年1冬期間の高田地方の毎日の降雪分布図を作り降雪分布の特徴からその出現頻度を調べた。これによると山雪 (30%), 里雪 (50%), 海雪 (20%) となっている。

【書 評】

か み な り

島 山 久 尚 著

B 6 版 230 頁 定価 280 円

地人書館 1961年9月30日発行

一ヶ月にわたる雷の出張観測のゴタゴタを片付け、漸く研究室での日常生活をとりもどした新秋の一日、著者から「かみなり」と題する近刊書がおくられてきた。紺色カバーの美事な電光写真と著者の筆になる題字は、手にとるものの読書欲をそそらずにおかない。巻を開くと、著者独特のたくみな筆致に、ひき入れられて一気に読了した。第一部の「かみなり」の中心をなすものは「雷の気象と雷の電気の起源」「雷の航空」の二章で、この方面の最近の研究結果が、平明にしかも要点をはずさず見事に解説されている。「らいかん」「雷雲への招待」「気象観測中のたこへの落雷」等々の雷研究のエピソード雷神の系譜」「かみなり談義」等の雷に関するエッセイには、学術論文からは求められない知識が盛り込まれてだけでなく、著者の長年の体験と巾広い教養が紙面ににじみ出ている。第二部「気象の眼」では話題が、天気予報、人工降雨、地磁気観測から、こんびら参り、ヘリコプターでの富士登山に迄ひろがっているが、平明でたくみな解説と滋味あるエッセイ風の読物がくりひろげられている点は第一部と全く同様である。第三部「お天気西遊記」は著者のヨーロッパ、アメリカへの旅行記で、西欧を結ぶ航空路やアメリカ大陸横断の旅客機の窓を通じて、又ブラセル、ロンドン或はボストンの街角で、随処に科学者でありエッセイストである著者の目がくまなく行き届いた見聞記がつづられている。ニューメキシコに3年住み、隣州アリゾナへはしばしば旅行した私にとって、「アリゾナの風土と生活」を描いた部分は特に感銘が深い。著者自ら撮影した写真と相俟って、この地方の

特色が美事に浮き彫りされている。

第一部中のエッセイ、第二、第三部については、私があればこれあげつらう余地はなく、ただ気象、地学或は文化一般に興味をもつ会員諸氏の味読をすすめるだけである。「雷の気象と雷の電気の起源」の章は、この問題をわかり易くしかも学問的にも正確に解説している。「らいかん」の知見や、著者自身のオリジナルな研究結果も含めながら全体として調和のとれた記述を行なっている点、この章自体が独立した雷雨の小教科書をなしているといえる。ただ雷の電気の起源については、個々の学説は懇切に解説されているが、記述が全体として平面的、羅列的に流れたきらいがある。対流説の価値付けは将来の問題であり、降水説についても尚今後の雲物理の発達にまつ所が大きいことは言うまでもないが、室内試験で扱える基本的な帯電現象の研究は、試行錯誤的・現象論的なものから、系統的・物理的なものへと進んできている。霧氷の生成、氷晶の摩擦分離により帯電の実験結果が、かつては区々で統一的に概括することが困難であったのにくらべ、レーノルズの実験以来、この種の帯電現象では温度差のある二つの氷の接触分離による電荷分離が基本的なものであり、霧氷の生成の帯電もこの効果にほかならないことが判明してきた。彼自身が推定するように、温度差によるプロトンの拡散によってこの効果を物性論的にも説明することが可能な段階になってきていることを付記したい。

(北川信一郎)